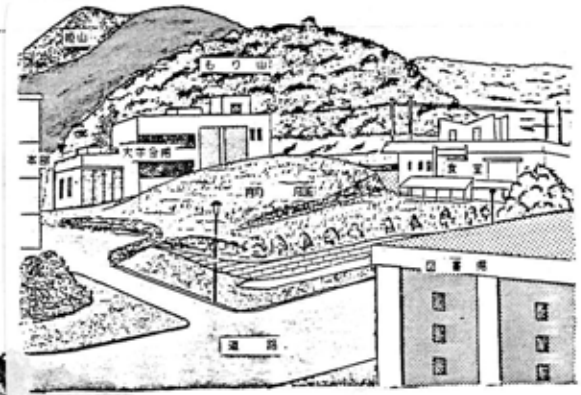
山口大学
埋蔵文化財資料館だより

No. 4

〔1989年冬の号〕
山口大学埋蔵文化財資料館

今までの発掘の成果から、復原してみました。
第２学食～学館前庭～本部は集落域。
学館は谷で湧水、井戸が掘られています。
図書館には水田が拓かれていて、
教養部の北半分は沼地でした。



弥生時代の風景（大学会館～図書館周辺）

目　次

弥生時代の風景（大学会館～図書館周辺）… (1)
『古代人の信じたもの』展 結果報告…(2・3)
遺物からの「発見!!」…鼻緒が語る、下駄の秘密…(3)
Q＆A … なぜ木製品は水に入れて展示してあるの？ …(4)
接点 4 …【岩石学と考古学 -石の産地推定-】…(5)
業務報告…… (5・6)

企画展《さわってみる歴史》 第２回 『古代人の信じたもの』展 結果報告

さわって確かめることができる、当館の企画展。第１回がうつわの技術史的な展示だったので、第２回は古代人の精神や信仰にスポットをあてました。また、人文学部考古学研究室からは、出品と展示の協力を得て、内容の濃いものとなりました。

前回→今回の改善点

館内に音楽を流す。
展示の説明文を最少限にとどめ、活字を大きくする。
説明パネルは、壁に立てかけても曲がらない材質のものを使う（発泡スチロール）。

期　　間	来館者
10月24日～12月10日。寒かったせいか、客足は今ひとつ。実日数40日。	のべ １１７名

【アンケート結果】（回答者 33名、回収率 約28％）

1．所属部局	学　生	26（人文12、理5、教育0、経済2、医3、工1、農3）
	教　官	1（教育1）
	事務官	1（人文・理1）
	その他	5（地元の方2、他大学の学生2、他大学の教官1）

2．【企画展を知ったきっかけ】は、館の前を通りがかってたまたま知ったという人がほとんど。ＰＲは、やはりカラーの大きなポスターなどの配布・掲示が必要。

3．【前回の『土から生まれた容器』展にも来館した人】は、以外に少ない（10名）。つまり、今回初めての人が多い。ということは、今後企画展の回数を重ねれば、それだけ広範囲の人が来館するものと思われる。企画展も、「継続は力なり」である。

4．【展示で一番印象深かったもの】としては、棺のコーナーの壺棺・甕棺が、大きな完形品のせいもあって最もインパクトが強かった様子（7名）。次に多いのが鏡だった。意外だったのは、装飾品類をあげた人が少なかったことで、むしろ、人骨や朝顔形円筒埴輪など、黄泉の世界のもののほうが興味をひいたようである。館内が寂しすぎるという前回の反省から、今回はＢＧＭとして弥生時代の土笛の音色をカセットテープで再現し、好評を得た（不気味だという意見もあったが…）。「富」の墨書土器もあいかわらず注目された。土器の模様を自分で粘土に描いてみるコーナーでは、熱心に実験する人が多かった。

壺棺

5．【展示の良い点】は、前回と同じく「直接さわれること」との回答（10人）が多い。説明やパンフレットがわかりやすかった、展示が見やすかったなどのほか、土笛の古風な音色がよい、模様の実験セットがおもしろかった、などの回答も。

しかし逆に、【悪い点】として、企画展があるのかないのか来てみてやっとわかった、もっと宣伝するべきだという指摘が多く、依然としてＰＲ不足はあまり改善

できていない。展示品が少ないのは、展示室のスペースの現状ではこれが限度なので、ご理解下さい。前回、説明がやや多すぎて疲れるとの指摘があったので、今回はなるべく簡素にしたところ、もっと詳しい説明がほしいとの意見あり。なかなか難しい問題のようだ。視覚に訴えるもの(カラーの大きな写真・絵など)がほしい、展示の棚を見やすい高さに、という意見は、次回から採り入れたいと思います。

6.【今後の企画】は、今話題の「藤ノ木古墳」の出土品が見たいという希望や、古墳をテーマにしてみては、との提案があった。木製品がもっと見たい、一つの時代に絞って掘り下げてほしい、土器や石器の製作実験をしたいなどの要望もある。学内のどのあたりでこれらのものが発見されたのか知りたいなどの意見も。

展示可能なものは、なるべく今後の企画展で要望にお応えします。ただ当館は、あくまでも大学内の発掘品を中心に、さわってみることをメインに展示するので、基本的に、他の機関から展示品を借りてくることはしません。ご理解下さい。

7.【当館への要望】は、やはり「もっとPRを」の一言に尽きるようだった。誰もが利用できる施設として、もっと開かれたイメージを作るよう、努めます。

「ぜひ小学生の子供にさわらせたい」と書いて下さったお母さん、ありがとうございました。次回はぜひ、ご一緒にどうぞ。

次回の企画展（4～6月を予定）は、当館の遺跡調査開始10周年を記念して、『学内の調査10年の成果』展を計画しています。

【資料紹介コーナー】 遺物からの「発見!!」

鼻緒の穴が語る、下駄（げた）の秘密

大学会館の敷地から、下駄ふたつ、発見。

写真左は、長さが18.9cmなので、子供用と思われます。鼻緒の穴が細いのは、おしゃれな下駄ですから、おそらく少女のよそゆき用だったのでしょう。

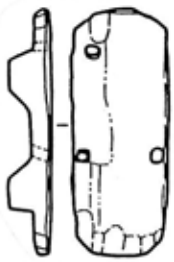
写真右は成人用。写真は裏側なので見えませんが、表には右足の跡がくっきり残っています。一般の庭履きで、俗に「便所下駄」と言われたものです。

右足用・左足用の区別をせず、前穴を中央にあける木のはきものは、実は日本にしかありません。もともとは日本でも、前穴を右か左かに寄せて、片足専用に作る下駄が主流でした（右図）。

前穴を中央にあけるタイプは、下駄の需要が増す平安時代以降、一気に主流の座を奪いました。江戸時代に庶民に下駄が完全に定着し、現在でも愛用されているのは、左右別々に作らずにすむ、大量生産向きの形に切りかえたからこそ、という見方もできるのです。

鼻緒の穴ひとつにも、歴史の重みを感じますね。

室町時代の下駄作り
（七十一番職人歌合絵巻）



右足専用の下駄
（古墳時代・埼玉県池守遺跡）

Q&A なぜ木製品は水に入れて展示してあるの？

（企画展アンケートの質問：医学部・男子学生より）

土に埋まっている木材は、腐ってしまうのが普通です。運よく残るのは、水分を多量に含んだ土にずっと埋まっていた場合ですが、その場合でも長い間に、木の主要な成分が失われ、かわりに水分が過剰にしみこんでいるので、極端に乾燥に弱くなっています。

乾いてヒビ割れた枯木を見たことがあるでしょう？　今まで水分でふくらんでいたところが空っぽになるわけですから、しぼむのが当然です。しかし、遺跡から発掘された木材が乾燥すると、枯木どころの縮み方はではありません。下の写真がその例です。

木の成分がほとんど水になっていた上に、木それ自体がやはりもろくなっていますから、水分が蒸発してしまった木材は、原形がわからないくらい、見る影もなく縮みます。木の遺物は、乾燥する過程で壊れてしまうのです。水に入れて保管するのは、そのためです。

しかし、水中保存は、最善の策ではありません。密閉できる容器が調達できればまだよいのですが、密閉できない場合は、水の蒸発に気を配らなければならない上に、長期間入れっぱなしにするとカビが繁殖して、結局木の形が崩れてしまいます。たとえ水にカビ防止剤を加えておいたとしても、容器の移動の不便さ、展示の難しさは、変わりません。

水分がなくても木の組織が崩れないようにする、恒久的な保存方法が、実はあります。

①水分をまるごと別の物質に置きかえる『ポリエチレングリコール（ＰＥＧ）含浸法』
②木に負担をかけずに乾燥させる『真空凍結乾燥法』『アルコール・エーテル・樹脂法』

などの化学処理をすることです。ＴＰＯに応じ、各方法の利点を生かして使い分けるところまで技術は進んでいます。水中に保管するのは、あくまで保存処理をするまでの臨時の策なのです。

乾燥前

乾燥後

カシ（広葉樹）

当館には、鳥形木製品をはじめ、鋤の柄・鍬・肘掛の脚・木簡・井戸の枠・紡杵の柄、前ページで紹介した下駄など、多くの木製品が保管されていますが、まだ保存処理は実現していません。

当館には処理設備がないので、外部に発注して処理してもらうことになります。なにぶん費用のかかることですので、すぐにというわけにはいきませんが、実現にこぎつけるための努力を、続けている最中です。

せっかく「さわってみる」企画展に来たのに、木製品にはさわれないと落胆した方もいたのではないでしょうか。近い将来、鳥形木製品や下駄を、自由に手に取って見ていただけるような、その名に恥じない「さわってみる」企画展ができたらと思います。

山口大学の下には吉田遺跡が眠っていることは、すでに皆さん御存じのことでしょう。この遺跡を発掘調査すると、いろいろな遺物が出土しますが、その中に石の道具があります。これをよく見ると、山口県では産出するはずのない岩石が使われていることがよくあります。真っ黒いガラスのような黒曜石はその代表的なものです。では、このような岩石はどこから持ってきたのでしょうか。そこで登場するのが岩石学です。ここでは黒曜石を例にとって話を進めましょう。

黒曜石は火山岩の一種ですから、限られた場所でしか産出しません。また、それぞれの原産地の黒曜石を分析して化学組成を調べてみると、産地ごとに化学成分が違っていることがわかります。それならば、遺跡で出土した黒曜石の成分と、原産地の黒曜石の成分とを比較すれば、どこの黒曜石を使っているかが明らかになるではないか、ということになります。

残念ながら、まだ吉田遺跡で出土した黒曜石製の道具については、調べておりません。しかし、宇部市から小郡町にかけて分布している遺跡から出土した黒曜石については、調べることができました。その結果、佐賀県や長崎県、島根県の隠岐島後の黒曜石を使っていることがわかりました。また、東京の遺跡では、長野県や伊豆諸島などの黒曜石を使っていることがわかっています。こんなに遠くまではるばる石を取りに行ったのでしょうか。それとも物々交換で手に入れたのでしょうか。

こうして、古代の交易、文化交流といった問題が浮かび上がってきます。ここからは、考古学の出番です。こうした分野は、考古学ではまだ新しい分野であり、あまり研究も進んでいません。それだけに夢のある、魅力あふれる分野でもあります。

寄稿　富樫孝志　理学部 岩石学研究室 研究生（人文学部考古学研究室 卒）

【次号は…『文献史学と考古学 －木簡－』】

業務報告【昭和63年11月～平成元年１月】

★調査……立会調査４件を、下記の学内工事に伴い実施。

1.サッカー・ラグビー場の整備（11月18日・１月27日）
……地表から13cmの深さのところで遺構の埋土または遺物包含層と思われる土を確認。そのため工事は、深さ13cm以内の掘削でおさまるように工法を変更した。

2.教育学部附属山口中学校 屋内消火栓用貯水槽設置（12月19・20日）
……遺物包含層の小さなかたまりが散見される。要注意。調査は継続する。

3.工学部 ゴミ焼却設備新営（１月６日）……顕著な知見なし。

★外部からの図書寄贈【11月～１月】　　凡例：【発行所（個人寄贈者）】…『書名』

貸し出していますので、ご利用下さい

【河内村教育委員会】…『石川県石川郡河内村福岡遺跡』
【天理大学附属天理参考館】…『天理参考館報』創刊号
【㈶八尾市文化財調査研究会】…『小阪合遺跡〈昭和59年度 第４次調査〉』
【㈶枚方市文化財研究調査会】…『図録・枚方の遺跡』『10年のあゆみ』
【高槻市教育委員会】…『昭和59･60年度高槻市文化財年報』
【㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター】…『京都府埋蔵文化財情報』第29号
『考古展・第７回 小さな展覧会』
【岡山大学埋蔵文化財調査研究センター】…『岡山大学構内遺跡調査研究年報』５
【㈶倉敷考古館】…『倉敷考古館研究集報』第20号
【山口大学人文学部考古学研究室】…『山口県雨乞台遺跡の発掘調査』
【美東町教育委員会（池田善文）】…『塔ノ塚発掘調査報告書 付、美東町長登発見の須恵器について』
【九州古文化研究会（桑原邦彦）】…『山口県防府市桑山塔ノ尾古墳－その史・資料集成と再検討－』
【徳島県博物館（近藤喬一）】…『特別展・朱の考古学－辰砂と若杉山遺跡－』
【太宰府市教育委員会】…『篠振遺跡』
【太宰府天満宮】…『太宰府天満宮－太宰府天満宮境内地発掘調査報告書』第１集
【福岡県立小倉高等学校考古学部（山中英彦）】…『福岡県立小倉高等学校創立八十周年記念 まがたま』
【千歳村教育委員会】…『高添遺跡－出口地区－』
【大野城市教育委員会】…『大野城市の文化財』第19･20集『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅰ』
『仲島遺跡Ⅶ』『釜蓋原遺跡』『森園遺跡Ⅰ』
【福岡市教育委員会（菅波正人）】…『拝塚古墳（重留１号墳）説明会資料』
【岩崎美術社（木下忠）】…『双書・フォークロアの視点３　湿田農耕』

★資料貸出記録

＊図書　　７件（教官３、学生４）：５件返却済み、２件未返却

＊＊＊